

洗礼者ヨハネの喜び

―主の母マリア訪問の日（5月31日）に寄せて

奨励	井田 泉【いだ・いずみ】
奨励者紹介	日本聖公会奈良基督教教会牧師 親愛幼稚園園長

そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家にに入ってエリサベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」

（ルカによる福音書 1 章39―45節）

主よ、人の望みの喜びよ

先ほど前奏で弾かれたのは、バツハ作曲「主よ、人の望みの喜びよ」という題で知られている曲です。
この曲は実は、今朗読していただいた聖書の箇所と深い関係があります。今日の聖書は、イエスを胎に宿したマリアが、親戚のエリサベトを訪問した場面でしたが、そのマリアのエリサベト訪問を記念する日の礼拝のために、バツハはカンタータ 1 4 7 番を作曲しました。その中に含まれるのが先ほどの「主よ、人の望みの喜びよ」なのです。
バツハはキリスト教ルター派の熱心な信徒で、ドイツのライプツィヒの教会と学校の音楽監督でした。バツハはライプツィヒの教会でささげられる礼拝のために膨大な音楽を作曲しました。その中の一つが、マリアのエリサベト訪問の祝日の礼拝のためのカンタータ 1 4 7 番「心と口と行いと生活は」です。全部で10の曲からなっています。先ほど演奏された曲は、10曲の中の第6曲と最後の第10曲（コラル）です。第6曲の後に説教がなされ、その後第7曲以降が演奏されました。礼拝は全体で2時間はかかったと思われます。
今から290年前の1723年、ライプツィヒのおそらく聖トマス教会で、マリアのエリサベト訪問の祝日の礼拝が行われました。今日と同じ聖書の箇所とその続きが朗読され、その箇所についての説教があって、そのときあの曲が初めて演奏されたのでした。
今日は5月29日ですが、明後日の5月31日がマリアのエリサベト訪問の日とされています。それで今日は聖書のその箇所に近づいてみることにしましょう。

マリアのエリサベト訪問

ナザレの貧しい娘マリアは、当時およそ15歳で、ヨセフと婚約中でした。そのマリアが天使ガブリエルから「あなたは神の子を産む」と告げられたのです。容易に受け入れがたい内容でした。婚約者ヨセフと無関係の子どもを自分が身ごもったとなれば、どんな恐ろしいことになるかわかりません。けれども天使ガブリエルとのやり取りの末、マリアは「わたしは主の僕（はしため）です。お言葉どおり、この身に成りますように」と言い、天使は去って行ったのでした。
ある言い伝えによれば、それは3月25日であったとされます。クリスマスからちょうど9カ月前のことです。
マリアは恐れと決意をもって天使の言葉を受け入れたものの、だれにもそのことを話すことはできませんでした。婚約者ヨセフにも話せません。2カ月の間、マリアはこのことを自分の心の奥に秘めて祈っていたのですが、しかし神の子を産むという重い使命を一人で受けとめ続けるのは耐えがたいことでした。
ある日、マリアは決意して立ち上がり、親戚のエリサベトに会いに行くことにしました。エリサベトにだけは、自分の身に起こったことを打ち明けたいと思ったのです。天使ガブリエルがあのとき、「エリサベトも神の力によって子どもを身ごもり、もう6カ月になっている」と言ったのをマリアは記憶していました。それからもう2カ月たっています。
マリアはガリラヤのナザレを出発し、ユダの山里に向かいました。数日かかったでしょう。おそらくエルサレムからそれほど遠くない所です。エリサベトの夫ザカリアは、エルサレムの神殿に仕える祭司でした。
「そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家にに入ってエリサベトに挨拶した。」（ルカによる福音書 1 章39―40節）
「急いで」という言葉のなかに、マリアの気持ちを感じられる気がします。

胎内の子がおどる

「マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。『あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。』」（ルカによる福音書 1 章41―45節）
大きな喜びが湧き起こりました。マリアは神から大切な使命を託されてそれを引き受けた。エリサベトはそれを瞬時に理解し、一緒に喜び、その使命を共に引き受ける決意をしたのです。世間の無理解、あざけり、迫害があったとしても、神の計画の実現に参加することこそ何ものにも代えられない幸福なのです。二人は一緒に喜び合いました。
ここで注目したいのは、このとき、マリアとエリサベトが出会っただけではなく、マリアの胎内のイエスと、エリサベトの胎内のヨハネが出会ったということです。
「マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。」（ルカによる福音書 1 章41節）
エリサベトは言いました。
「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。」（ルカによる福音書 1 章44節）
8カ月になっているエリサベトのおなかは大きい。胎内の赤ちゃんがおなかの中で喜びのあまりとびはねる、おどるのがはっきりわかるのです。やがて生まれる救い主（まだ宿って2カ月です）に会えてうれしい。イエスと共に歩んでいけるのがうれしい。
マリアとエリサベトは、神さまから託されたよいこと、正しいことのために共に祈り共に歩む同志です。まだ生まれていないヨハネとイエスも、すでにこのときから、この世界に愛と正義と平和を実現していく同志です。

洗礼者ヨハネと
イエスの再会

それからおよそ30年が過ぎました。ヨハネはこの世界に迫る神の審判を告げ、人びとに悔い改めと人生の新しい出発を呼びかけました。人びとはヨハネの訴えに自分の良心をゆさぶられて、ぞくぞくと集まり、ヨルダン川でヨハネから罪の赦しの洗礼を受けました。
そのとき、イエスもヨハネのところに行き、洗礼を受けたいと申し出ます。ヨハネはためらうのですが、イエスの強い求めにより、ヨハネはイエスに洗礼を授けます。30年前の喜びが今、現実の喜びとなってあふれます。30年前は母の胎の中であって無意識の喜びであったかもしれませんが、今は現実のなかの喜びです。イエスが神の使命を受けて、神と人びとのために身をささげて生きようとする決意をヨハネははっきり感じます。ヨハネはこのイエスを人びとに紹介することができることを喜びます。
イエスが洗礼を受けたとき、天から「あなたはわたしの愛する子」（ルカによる福音書 3 章22節より）という声が聞こえました。
しばらくヨハネのところに滞在していたイエスは、やがて独立して自分の道を歩むことになります。それからどれくらいたったでしょうか。ヨハネはイエスが自分のほうに近づいて来られるのを見て、感動のあまり声を上げます。
「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」（ヨハネによる福音書 1 章29節より）
イエスはこの世界の救いのために世の罪を引き受けて苦しみ、血を流して死なれる。それをヨハネははっきりと感じたのです。
やがてヨハネは領主ヘロデの悪を公然と責めたために捕らえられました。そのとき、イエスは自分の時がきたことを感じ、公的な活動を開始されます。ヨハネの働きを、イエスは引き受けられるのです。

洗礼者ヨハネの喜び

あるときヨハネは言いました。
「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」（ヨハネによる福音書 3 章29―30節）
イエスが主役だ、とヨハネは言うのです。言わばイエスが結婚式の花婿であり、自分は花婿の友人、結婚の介添人だ。花婿の声が聞こえるのがわたしにはこの上なくうれしい。真の働きをするのはイエスであって、自分はそのイエスを指し示す。
ヨハネの喜びは、母エリサベトの胎内にいたときだけのものではありませんでした。
30年を経て、ヨハネはあらためてイエスと出会い、喜びに溢れました。この偽善、虚偽、抑圧、虚栄、自己保身の横行するこの世にあって、イエスが真実と愛のため、人びとの救い

のために自ら苦難を引き受け、傷つき、命を投げ出される。イエスが人の魂と世界を救うのを、ヨハネは見て喜んだのです。

私たちも、イエスにほんとうに出会ったとき、喜びが溢れます。イエスの真実、イエスの愛、イエスの命は、私たちに慰めと励ましと希望を与えます。

何と幸いなことが

ヨハネがイエスに感じた喜び、マリアが、エリサベトが感じた喜び。また後の人びとが感じた喜び。——それをバッハが、マルティン・ヤーンという人の詩を借りて音楽にしました。

今日の礼拝の最後にもう一度弾いていただく、バッハのカンタータ 147 番第 6 曲のコラール、ヤーンの詩のドイツ語歌詞の意味をご紹介します。終わります。

なんと幸いなことが、わたしにイエスがおられることは。

ああ、どれほど堅くわたしは彼を抱くことが。

彼はわたしの心を力づけてくださる、

わたしが病のときも、悲しみのときも。

イエスがわたしにおられる。彼はわたしを愛し、

ご自身をわたしに与えてくださる。

ああ、そのゆえにわたしはイエスを離さない、

たとえわたしの心が破れても。

2013年5月29日 同志社スピリット・ウィーク春学期
京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録